



末日聖徒イエス・キリスト教会 THE CHURCH OF JESUS CHRIST OF LATTER-DAY SAINTS
TOKYO JAPAN TEMPLE

日本 東京神殿

2022.7.3 奉献式レポート DEDICATION REPORT

2022年7月3日(日)、日本東京神殿は再奉献式の朝を迎えた。連日続いた記録破りの猛暑から一転、空には強い日差しを遮る雲が一面を覆っている。あたかも雲の柱に導かれるように人々は会場へ向かった。奉献式は9時、12時、15時の3回行われ、バプテスマを受けた8歳以上の子どもや青少年も参加できる。聖徒たちは、一人でも多くの人々が参加できるようにと互いに誘い合い、ぎりぎりまで準備をしてこの日に臨んだ。

奉献式は東京神殿の日の栄えの部屋で行われ、一部の会員は東京神殿の各部屋で、東京神殿地区の会員は地元の集会所に集まり、スクリーンを通して参加した。今回の奉献式のために、ヘンリー・B・アイリング管長、十二使徒のゲーリー・E・ステューブソン長老が訪れ、アジア北地域会長会第一顧問のジェームズ・R・ラズバンド長老、第二顧問のジョン・A・マキューン長老、東京神殿会長会の青木秀樹^{あおきひでき}会長、野田雄司^{のだゆうじ}第一顧問、鈴木 勲^{すずき いさお}第二顧問と、メイトロン、メイトロン補佐が臨席した。

神殿内外の大幅な改修工事のために2017年9月末に東京神殿が閉館してから4年9か月。この間、教会内外で大きな変化があった。2020年早春に起きたCOVID-19の世界的パンデミックにより神殿や集会所は一時閉鎖され、伝道方法も集会の仕方も一変。神殿の改修を終えた後も、繰り返す感染拡大により奉献式は順延し、多くの人々が神殿から長らく遠



ざかっていた。そして2022年3月、第六波が徐々に落ち着き、社会生活が通常に戻りつつある頃に奉献式の日程が発表された。先立って行われたオープンハウスには、地域のオピニオンリーダーをはじめ、延べ約1万9,000人が集った。聖徒らは友人や家族を誘い、ボランティアとして奉仕し、この再奉献を契機に神殿へ、ひときわ心と思いを向けたのだ。これが最高のタイミングであったことが後に分かる。7月に入るや新規感染者数のグラフは急反転して第七波を描き、日本社会は未曾有の感染爆発を経験することになる。

神の愛と光の中で

神殿でのセッションに参加する人の多くが1時間前には神殿別館に到着し、整理券を受け取り、控室で待機した。控室も廊下も人であふれている。時間になると、

案内係の姉妹たちが人々を指定された各部屋へと誘導した。聖徒たちは神殿前に設置された白いテント内で、ボランティアからシューカバーを履かせてもらう。神殿内に入ると、奉仕する人たちの輝く笑顔に迎えられ、清澄な中にも心地よい緊張の糸がびんと張られたような各部屋へと進む。開会45分前には部屋いっぱい並べられた席がほぼ埋まる。子どもや青少年の姿も見受けられる。座席に置かれていた、最後に聖歌隊とともに歌うための歌詞カードを眺め、部屋に設置されたモニターから流れる各国の神殿の映像と美しい賛美歌を聴きながら、人々

は敬虔に開会を待った。

開会15分前、「あつ、アイリング管長」の声で、全員が立ち上がる。日の栄えの部屋に入る前に、アイリング管長、ステューブソン長老、ラズバンド長老、マキューン長老と地域会長会の姉妹たちは、神殿内のすべての部屋を巡っていたのだ。白い神殿着を着たアイリング管長とステューブソン長老が聖徒らに手を振ってあいさつをする。自分を慕い輝く目で見つめる会員たちを、大きくうなずきながら見回し、微笑みかけるアイリング管長。思わぬ管長の訪れに、涙ぐむ人もいる。ステューブソン長老も一礼をして入室し、親しみをこめた笑顔で手を振った。

その後映像は切り替わり、日の栄えの部屋が映し出される。美しい前奏曲が流れ、開会5分前には各部屋のドアが閉められた。



ネルソン大管長の約束

日の栄えの部屋では、全員が起立して迎える中、アイリング管長、スティーブソン長老、ラズバンド長老、マキューン長老が列席者に向かって席に着いた。やがて司会のスティーブソン長老が立ち、「愛する兄弟姉妹の皆さん」と日本語で呼びかけ、神殿内のすべての部屋、中継で奉獻式が行われている全会場にいる人々を歓迎し、當真コーディネーターご夫妻をはじめ、再奉獻を準備してきた委員会に感謝とねぎらいの言葉を述べた。

次いで聖歌隊が入場し、開会の賛美歌を歌う。各セッションでは、数か月間の練習を重ねて臨む18-19名のメンバー*1が、主を称える喜びあふれる演奏を披露する。開会の祈りがささげられ、再び聖歌隊が歌った後、ラッセル・M・ネルソン大管長からのビデオメッセージが流された。

「神殿が建てられるたびに、地上におけるサタン力が弱まります。神殿は、神が忠実な子どもたちのために用意された最も神聖なものです。」ネルソン大管長は、神がアダム時代から聖約や神殿について教えてこられたこと、この神権時代の初期に、貧困と迫害の中でも神殿を建てるようにと言われたことを聖徒らに思い起こさせ、こう約束する。主の宮には人生を変える力があること。神殿の入り口で、わたしたちは重荷を置き、他のいかなる場所でも得られない祝福を受けること。赦し、悔い改める能力が増し、永遠の観点から人生を見られるようになり、神性の力が顕れること。「主と主の聖なる宮を生活の中心、信仰の中核とするなら、守られます。」

生活に神殿を組み入れる

地元の何人かの会員による靈感に満ち

た証の後、第2セッションでマキューン長老は、オープンハウスに訪れた人々に注がれた御霊について、日本語で証言する。「彼らの多くは、『帰りたい。神殿の中は空気が違う。鳥肌が立った』などと語りました。御霊の一部が与えられ、喜びで満たされました。でもわたしたちは、聖約に従順であることで、より大きな喜びがもたらされます。」神殿で交わす一つ一つの律法を挙げて、「これらの聖約によりわたしたちは努力するよう招かれます。聖約を交わし、守るならば、道が与えられます。神殿を生活の中心とすれば、救い主とのつながりが強くなり、キリストの完全な喜びを得られます。」また第3セッションにて、リーハイが示現で見た鉄の棒に象徴される「神の言葉」とは、イエス御自身のことをも指していると述べた。「神殿は聖約を守り、神の言葉につかまると約束する場所です。……定期的に参入することを生活に組み入れるなら、鉄の棒を握ることができ、皆さんと家族に守りが与えられると約束します。」

必要な奇跡を起こしてください

聖歌隊が入場して賛美歌を歌う。次いでスティーブソン長老が立ち、「日本は第二のふるさとです」と、流暢な日本語で語り始める。

まず、最初の宣教師が横浜に上陸した1901年から日本教会歴史を振り返り、現在13万人の会員を擁するところまで概観する。「1975年に東京神殿建設が発表され、日本の聖徒の夢がかないました。」

そして今回、自身も何度もツアーを案内したというオープンハウスを振り返り、「日本のモチーフや主の美しい創造物に、皆が心を動かされていました。建物だけでなく、それ以上のものを感じ、涙を浮かべ



る人々も大勢いました。先祖のために儀式をするを知って感動を覚えた人々、結び固めに希望を感じた人々もいました。」多くの人から、なぜ神殿建設を優先するのかと尋ねられたという。「神殿では、自分のために備えられた神の計画を理解することができます。また、天の家族と地上の家族、家族が永遠であることを理解する場所でもあります。神殿は家族を永遠に結ぶ場所であり、そのことが分かれば、皆が神殿に行きたいと思うでしょう。」

スティーブソン長老は約束する。「皆さんと家族の将来のために時間を使ってください。神殿で奉仕するなら、必要な奇跡を起こしてくださいと約束します。……ここは主の宮であると証します。神殿が見えている間は、決して道に迷うことはありません。」

アイリング管長、3つの思い

そしていよいよアイリング管長が壇上に立つ。笑顔で会衆を見回し、「アイリング家では、7人が日本で伝道しました。日本



にとても深い愛を感じています」と語りかける。日本とアイリング管長との縁の深さに顔をほころばせる聖徒たち。アイリング管長は、奉献の祈りをささげるにあたり、心にあふれる3つの思いについて述べた。

「一つ目は、主に深い感謝を感じるということです。主は、神殿を建てるようにと言われました。神殿は聖徒が感謝をささげる場所であり、『……清くないものがそこに入るのを許さなければ……わたしはそこに来るからである。……（そこに入って来る心の清い者は皆）、神を見るであろう』^{※2}と言われました。……

二つ目は、光り輝く気持ちを感じるということです。東京の街の明かりをはるかにしのぐ輝きです。一番の光は信仰と献身によってもたらされます。また、奇跡は聖文を読むたびに起こり、そのつど新鮮な言葉だと感じます。光に照らされたように、聖文の必要な箇所が強調されるのです。神殿は祈りの答えを受けられる場所です。神殿は、求めるときに光と真理を受けられる場所です。神殿は天に戻るとい

うことを理解し、光と栄光を経験する場所です。」張りのある声が続く。

「三つ目は、御父とイエスに対して、愛が増し加えられるのを感じるであろうということです。ノーブー神殿の再奉献の祈りでは、『永遠へ道を拓いたイエス・キリストへの愛が増し加えられますように』という言葉があります。聖くなるにはイエス・キリストの贖いに頼る必要があります。聖められると、主の愛を感じられます。」

最後に、アイリング管長は二人の預言者を思い起こすようにと語った。一人はジョセフ・スミス、もう一人は生ける預言者ラッセル・M・ネルソン大管長だ。「ジョセフ・スミスからネルソン大管長へ、ずっと神権の鍵が続いています。ジョセフは回復の預言者であり、ネルソン大管長は現在すべての鍵を保持する生ける預言者であることを証します。」

こう話した後、アイリング管長は奉献の祈りをささげた。力強く、一文一文を発するアイリング管長。天の御父に向けられる祈りに、聖徒たちは注意を傾けた。

コミュニケーション宣教師のジョン・ドーフ長老は、第1セッションの日の栄えの部屋での様子をこう語る。「89歳のアイリング管長はお年を召してゆっくりと歩かれます。でもマイクの前に立ち、あいさつして10秒もしないうちに、背がまっすぐに伸び、若者のようになりました。奉献の祈りになるとさらに力強くなり、別人のように感じました。」その変わりように驚き、思わず仰ぎ見たという。

天の群れと共に歌わん

第2セッションでは、奉献の祈りの後、ラズバンド長老^{※3}が日本語でホサナ斉唱について説明した。「ホサナ斉唱は古代から行われてきました。カートランド神殿

の奉献で歌われた『主のみたまは火のごと燃え』、ソルトレーク神殿の奉献で歌われた『ホサナ賛歌』これらを皆で歌うことにより、すべての奉献式が一つとなります。」そして、イエス・キリストがエルサレムに入場される時、群衆がシロの枝を振ってホサナと叫んだこと、バウンティフルの地を訪れたイエス・キリストに群衆がホサナを叫んだこと、カートランド神殿でホサナが叫ばれたことに言及する。

その後、神殿内と中継された各地の出席者の全員が立ち上がり、白いハンカチを振り、ホサナを叫んだ。皆の心が一つとなり、天に届くようにと神と小羊にホサナを叫ぶ。間を置かず、聖歌隊により「ホサナ賛歌」が歌われ、続けて「主のみたまは火のごと燃え」を、会衆も声を合わせて歌う。聖歌隊と会衆との一体感。抑えがたい御霊の現れに、霊が高揚し、涙があふれる。日の栄えの部屋で出席していた慶久花梨姉妹（静岡ワード）は、「これが天の群れなんだ。自分もこの群れの一員なのだと感じて、霊が奮い立ち、自然に涙が出ました。皆が同じ御霊を感じていました」と語る。聖歌隊の多くのメンバーも、天の軍勢が加わっていたことを思わせる証言をした。「歌いながら、『これは自分の声ではない』と感じました。その声はわたしよりもっとすばらしいテノールで、その方の声に感動してしまいました。「その場にいる人以上の、大勢の人々と歌っている感覚がありました。」

最後にホサナ賛歌は聖歌隊の「アーメン」の歌声で締めくくられ、閉会の祈りがささげられた。祈りの間中、部屋のあちらこちからすすり泣く声が響いた。祈りの後、アイリング管長は微笑み、スティーブソン長老は会衆に一礼してゆっくりと日の栄えの部屋を後にした。◆^{※4}

※2—教義と聖約97:15—16

※3—ホサナ斉唱は、第1、第3セッションではマキューン長老が、第2セッションではラズバンド長老が主導した。

※4—このレポートは、奉献式に参加した3人の記者のメモと記憶、インタビュー録音に基づいて記されている。文責：小林久子、稲葉英実、岡田琢治



末日聖徒イエス・キリスト教会
THE CHURCH OF
JESUS CHRIST
OF LATTER-DAY SAINTS
TOKYO JAPAN
TEMPLE
日本
東京神殿
DEDICATION PRAYER



ヘンリー・B・アイリング管長
再奉献の祈り

2022年7月3日

わ たしたちの天のお父様、わたしたちは天と地と万物を創造されたあなたをたたえ、あがめます。わたしたちは、あなたの愛する御子、救い主イエス・キリストの御名により、この聖なる日本東京神殿をわたしたちの生ける神であられるあなたに再奉献するために御前に集いました。

わたしたちは、あなたが、愛する独り子をわたしたちの救い主、贖い主、また模範として、この地に遣わして下さったことに感謝します。御子のおかげで、家族と一緒にあなたのみもとに戻るわたしたちの旅が可能になり、わたしたちは先祖や子孫とともに、幸福と光の中で永遠に生活できるようになりました。

わたしたちは、あなたの教会が聖なる神権の鍵と力とともに、また世界中の神の聖なる神殿で授けられている儀式と祝福とともに、回復されたことに感謝します。

わたしたちは、日本東京神殿のこの美しい改築と改装を実現した何百人もの熟練した有能な設計士やデザイナー、職工、作業員に感謝します。

わたしたちは、この建物の構造、壁、天井、床、窓、照明、物理的なシステム、そして聖なる儀式を執行するために使われるすべての物品を祝福して下さるよう、祈ります。

お父様、この改築で加えられたあらゆる装飾や美術品、見事な造りがその美しさを保つよう、祝福してください。また、この神殿の敷地が安らぎの地として保たれるよう、祝福し、聖別してください。

この神殿に危害を及ぼす恐れのあるものからお守りください。末日に預言されている大変動からこの神殿を保護してください。

わたしたちは今、あなたの祝福がこの民のうえにあるよう、祈ります。また、救い主のもとに来て神の御前に戻る唯一の道を選ぶよう、あなたの子供たちを招く忠実な宣教師たちのうえにあなたの祝福があるよう、祈ります。日本とアジア全体の宣教師たちが導かれ、聖なる神権の儀式を通して交わされる、あなたとの聖約を通してのみもたらされる幸福を求めている人たちを見つけることができますように、深い信仰をもって願い求めます。

天のお父様、これから先の試練の時において、末日聖徒の若人を祝福し、彼らの信仰を強めてください。永遠の命に至る細くて狭い道の中で彼らを導いてください。彼らの心に、神の神殿で永遠に結婚する願いを湧きたたせてください。その偉大な祝福にふさわしくあるという希望と決意を彼らに与えてください。

お父様、この神殿に参入するあなたの教会の会員を祝福してください。彼らが出会うすべての人にイエス・キリストの福音を分かち合いたいという望みを持つことができるように祝福してください。また、バプテスマを受けたときの約束を守るという決意を与えてください。それはすなわち、「神に贖われ、第一の復活の朝にあずかる人々とともに数えられて永遠の命を得られるように、いつでも、どのようなことについても、どのような所においても、死に至るまでも神の証人になること」(モーサヤ 18:9) です。

この神殿で奉仕するすべての人が、これが神の聖なる宮であるという確かな証を育むことができるように、祝福を願い求めます。主が導きと繁栄を与えて下さるという確信を彼らに与えてください。神殿会長とその顧問、神殿メイトロンとその補佐に、知恵と識別の賜物を授けてください。しかし、何にもまして、この聖なる場所を訪れるすべての人に対する慈愛、キリストの純粋な愛があるよう彼らを祝福してください。

イエス・キリストを信じる信仰に確固として立つことができる民となれるように、わたしたちを強めてください。主をいつも覚える聖約を守ることができるように、わたしたちをお助けください。

エリヤの霊が授けられるように願い求めます。わたしたちはそれに応えて、亡くなった愛する先祖の名前を神殿に持参し、永遠の命と昇栄の機会を彼らに提供することを約束します。

神の聖なる神権の権能により、わたしたちはこの建物と付随するすべてのものを、祈りの家、礼拝の家、永遠の聖約の場所として、あなたに再奉献します。あなたの栄光がこのうえにとどまりますよう、わたしたちの贖い主、イエス・キリストの聖なる御名により祈ります、アーメン。 ◆

「主はあなたの道をまっすぐにされる」※1

主を信頼して駆け抜けた陸上部の6年間——桐林良匠兄弟：広島ステーキ光ワード



青少年の
Love Share Invite

桐林良匠兄弟が通った中高一貫の修道中学校・高等学校。
校舎の懸垂幕が文武両道の名門校であることを物語る



2013年4月、修道中学校入学式の桐林良匠兄弟と両親

「100メートルは短いですが、スタートしてゴールに着く一瞬の中にたくさんの戦略や技術がある。その駆け引きが楽しいんです。」——瞳を輝かせて短距離種目の魅力を語る桐林良匠兄弟は、中学・高校の6年間陸上競技に打ち込んできた。良匠兄弟が通っていたのは修道中学校・高等学校。全国有数の進学校で部活動も盛ん、校舎正面には全国大会出場を祝う横断幕が何枚も掲げられる。多くの時間を部活動に費やすことが当たり前のように推奨される環境下で、教会員の良匠兄弟が安息日を守るには、思いも寄らない高さの壁を越えなければならなかった。

「小さい頃から鬼ごっこが得意で、走ることに自信がありました。」
2013年4月、修道中学校に入学したばかりの良匠兄弟は、

そんな思いから陸上部への入部を決めた。教会員の家庭に育ち、幼い頃から教会に

集っていた良匠兄弟には土日に練習がないということも決め手だったという。陸上部では修道高校の生徒も含めた6学年がまとまり、上級生の主導のもと自主的に練習に取り組んでいた。スポーツ系のクラブ経験のなかった良匠兄弟には全てが新鮮で、すぐに陸上競技の楽しさに目覚めた。

入部して間もない4月下旬、コーチから新入部員の呼び出しがあった。集まると試合の予定表が配られた。「土曜と日曜に開催される次の大会について、参加したい種目を書いて提出するように。」良匠兄弟にとって土日に試合があることは想定外だった。戸惑いながら予定表に目を落とした良匠兄弟は言葉を失う。出場したいと思っていた短距離種目はすべて、日曜日の開催だった。

帰宅した良匠兄弟は、日曜日の試合について家族と相談した。両親からは「まずは祈ってみて、その後で自分の正しいと思うほうを選びなさい。わたしたちから強

制はせんよ」と言われ、良匠兄弟は寝室で布団にくるまって祈った。祈り終えたとき、目の前の景色が不思議とよく見え、心の中が晴れたように感じた。「自分の都合で部活を休むことに罪悪感があったんですが、祈ったときに（安息日を守ることを）神様が喜んでるぞって感じて穏やかな気持ちになりました。」

しかし日曜日の部活動を休むためには陸上部の顧問に事情を話して許可を得る必要がある。友人たちからは、ほかの部活では日曜日に休むとコーチから退部を勧められると聞いていた。「すごく怖かったです。前の晩にともかく祈りました。」

翌日、良匠兄弟は勇気を奮って陸上部コーチのもとに向かった。教会に行くために必要なので、これからずっと日曜日だけ休ませてください、と恐る恐る伝えた。するとコーチはあっさり認めてくれた。「キリスト教なの？ 日曜日は出なくても大丈夫。その代わりに土曜日にできる種目をやりなさい。」思いもよらない寛大な言葉に良匠兄弟は主の助けを感じ、帰宅してから感謝の祈りをささげた。

渡された退部届

それからずっと、良匠兄弟は月に何度も行われる日曜日の試合を休み続けた。入



小学生の頃の良匠兄弟

※1—「心をつくして主に信頼せよ。自分の知識に頼ってはならない。すべての道で主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」箴言3：5-6
この聖句は2022年のユーステーマでもある



伝道に赴く良匠兄弟は福岡神殿で自身のエンダウメントを受けた
左から母親の千和姉妹、良匠兄弟、父親の慶兄弟



部して数か月たつと、上級生から批判の声が上がり始める。修道の陸上部は五輪選手を輩出している名門でもあり、競技に対して情熱を持っていた彼らは、試合を休む良匠兄弟を「不真面目」と見なし厳しくとがめた。

1年生の終わり頃になると、同級生部員たちからも日曜日に試合に出ないことに対する不満をぶつけられるようになった。ある日のことだった。放課後、グラウンドに張られた陸上部のテントの中で数人の同級生と話していた。「なんで試合出んのか?」「なんで教会とか行くんや?」口々に問い詰められ、説明しても納得してもらえない空気ではなかった。そんな中、一人があきれた様子で良匠兄弟に何かを差し出してきた。2枚の退部届だった。「ショックと、なんで2枚?っていう思いで混乱して。『じゃあもらっとくよ』って受け取るのが精一杯でした。」

良匠兄弟は退部届を家に持ち帰り、2枚とも紙飛行機にして飛ばした。渡されたときは平静を装っていたが悲しかった。「祈って感じて、なんとなく教会を選んだけれど、現実を思い知った気持ちでした。そのときは特別に速い選手でもなく、実力にものを言わせるという状況でもなくて……。」

手立てもない良匠兄弟が予感したのは、この状況はこれからもっとひどくなるということだった。苦しい気持ちの中で良匠兄弟は祈る。ほくを強くしてください、この危機を乗り越えられるように、陸上部をやめなくてすむように助けて下さい……そう祈って、その日はなんとか床に就いた。

「主ならどうされるだろう?」

良匠兄弟の予感は当たり、部員からの攻撃は激しさを増していった。「同級生の

半分くらいからは完全にハブられ^{※2}状態になりました。」良匠兄弟が練習をするだけで走り方をからかわれた。ほかの部員が部室に忘れたシューズを「お前取ってこい」と「バシリ^{※3}」要員にされたこともあった。一番つらかったのは無視されることだった。複数人から自分の存在をないものとして扱われることはなによりこたえた。

中学2年生の冬の夜のことだった。家族の祈りの後、寝室で布団を敷いた良匠兄弟はしゃがみ込み、そのまま動けなく



なった。「それまで積み重なってきたものが急に噴き出た感じでした。」

「まじで教会選ぶんじゃないか……」良匠兄弟はこのとき、自分の決断を初めて後悔する。しかし、主に対して不満をもらそうとした瞬間、ある思いが浮かんだ。「主ならどうされるだろう?」

それはこれまでずっと良匠兄弟を支えてきた問いかけだった。「教義についてあやふやでも、神様が完全な御方だということは知っていました。教義で『赦しなさい』と言われると納得できなかったけど『主ならこうされるだろう?』と想像することで赦すことができた。だからこのときも主ならどうされるだろうと考えて……。 (主なら) 恨まないって思いました。」

我に返った良匠兄弟は、主が最初に安

息日を守れるように助けて下さったことを思い出す。良匠兄弟は心から悔い改め、主に部活動が続けるための助けを祈り求めた。祈り終わると力が湧いてきて、このままではいけない、と思った。そして再度良匠兄弟は祈った。ほくは彼らと話をするので、どうか嫌がらせがなくなりますように、もし収まらなかったとしても耐える力が与えられますように――。

翌日から良匠兄弟は行動を起こした。嫌がらせを受けるたびに正面から相手と話し、やめるように求めた。それでも心ない仕打ちをされたときは寛容に接するように努めた。走り方をしつこくからかい続ける同級生には「俺は君の走り方も尊敬しているし、陸上の姿勢も目標にしているんだよ」と伝えた。主ならどうされるだろう?常にその問いかけが心の中で響いていた。「あのときは毎日、主に支えられていると感じていました」と良匠兄弟は当時を思い返す。「いつも祈ることで主が喜ばれるような態度をとることができて、自分は今、謙遜なんだと感じました。」

数か月たったある日、良匠兄弟はふと「そういえば最近、部活が楽しいな」と気づく。あれほど苦しめられた部員たちの



広島市の大会で土曜日の種目、400メートル走に出場（右端）



高3の体育祭にて
修道高校の体育祭では、その日だけ3年生は自由な髪型、
髪色で参加するという伝統がある。
次の日には全員が自主的に黒に染め直して登校する



桐林家の家庭の夕べに参加する陸上部員たち

攻撃は、ほぼ取まっていた。

「お前が命がけで行っている教会って どんなとこなんや?」

中学3年生になった夏、良匠兄弟の身の回りに小さな変化が起こる。「部の同級生たちから、教会について質問されるようになったんです。」思い当たるのは入部以来一度も日曜日の試合に出なかったという事実だった。「試合に出ないことを貫いたので『こいつは絶対に教会に行くんだ』と理解してくれる人が増えて、理解した人からどんどん教会に興味を持つようになった印象でした。」そして変化はついに、良匠兄弟に対して厳しい態度を崩さなかった上級生にまで及ぶ。

暑い夏の午後だった。陸上部の部員たちはグラウンドの日陰で各々練習前のウォーミングアップを行っていた。蝉しぐれが降り注ぐ中、準備運動に励む良匠兄弟のもとに数人の先輩がやってきた。たじろぐ良匠兄弟を囲み、彼らは口々に問いかけた。「なんで何があっても教会に行くん?」「お前が命がけで行っている教会ってどんなとこなんや?」「教えーや。」

かつて同級生から2枚の退部届を渡さ

れたときと同じ質問。しかし声の調子は全く違っていった。驚きの後、良匠兄弟の胸の奥にじわじわと喜びが広がる。「先輩方のほくと教会に対する怒りや不信感が、福音に対する興味に変わったのを感じました。」

良匠兄弟はこれまでの経験を思い出しながら答えた。「教会は、ほくが人に対して悪い感情を抱いたときに、その人に対して良い行動ができるように助けてくれる場所です。不完全なほくが、納得できるような行動をとれるように助けてくれるんです。」



部員たちのクリスマスパーティーのために千和姉妹が用意したプレゼントのブラウニー。教会のクリスマスカードを添えた

「へえ!」「なんかキリスト教徒っぽいなお前!」感嘆の声を聞きながら、良匠兄弟の心は安堵と深い感謝の念に満たされていた。「もう大丈夫なんだ、と初めて感じました。これでほくは安息日を守ることができる。長い間祈り続けてきたほくの願いを主が聞き届けてくださったことがわかって、本当にうれしかったですし、あのと悔い改めてよかったですと思いました。ちゃんと悔い改めたことで、主が与えてくださった祝福を後ろめたい気持ちではなく受け取れる状態にあったことがうれしかったです。」

良匠兄弟への質問の声はやむことがなかった。毎日、部活動が始まる前に誰かが良匠兄弟に福音に関する質問を投げかけた。知恵の言葉、純潔の律法、死後の世

界……これまで学んだ知識を総動員し、喜びを持って良匠兄弟は質問に答えた。

良匠兄弟を通して福音の原則を学んだ部員たちは、福音の実践にも理解と興味を示すようになった。

良匠兄弟はいつも、試合前には待合室で祈りのポーズを取り、心の中で祈りをささげていた。「声を出していないだけで、結構ガッツリ祈ってました。(笑)」中学3年生の秋頃、いつものように待合室で祈り終えた後で肩を叩かれる。それは以前、良匠兄弟の走り方をからかってきた同級生だった。当時すでに関係がよくなっていた彼に「何やってたん?」と尋ねられ、良匠兄弟は正直に「祈ってたんだよ」と答えた。すると驚いたことに彼は祈りに興味を示した。良匠兄弟は祈りの方法を教え、二人は待合室の片隅で一緒に祈った。

レースを終えた後、彼は爽やかな表情で良匠兄弟に話しかけてきた。「今までで一番良い走り方ができた、ありがとう。」——その時の経験は彼の心に残ったようだった。その後彼は学校生活の中でも祈り、良い気持ちを感じたと良匠兄弟に教えてくれた。自転車の鍵をなくしたとき、良匠兄弟と一緒に祈って鍵を見つけるという特別な経験もした。

逆境から、輝ける日々へ

それから高校を卒業するまで、良匠兄弟は陸上部を続けた。日曜日の試合に出場することはなかったが、試合を休むことで同級生や先輩から嫌がらせを受けることは二度となかった。それどころか、事情を知らない下級生が日曜日のことで嫌味を言おうものなら、同級生たちは「お前らが言うな!」と叱るようにさえたのである。

そして陸上部の部員たちの多くが桐林家族を通して福音に触れた。「家族は本

—— 青少年の
Love Share Invite



部活引退時に後輩からもらった色紙を眺める良匠兄弟

当にほくを助けてくれました」と良匠兄弟は感謝する。母親の千和姉妹は部員たちを家に招き、たびたび手料理をふるまった。自宅でのお泊まり会では両親が準備した家庭の夕べが開かれた。全員で聖典を輪読し、教会のビデオを視聴した。「真剣な顔で聖句を輪読する友達の顔を見てとても不思議な気持ちでした。」また、陸上部ではない別の友人は良匠兄弟を通して福音を知り、バプテスマを受けた。

逆境によって始まった中高生活は、多くの友人たちに家族で福音を分かち合う、何

にも代えがたい特別な6年間となった。

陸上部を引退するときに後輩から贈られた色紙を、良匠兄弟は卒業して数年たった今も大切にしている。「本当に優しい方なので、皆に愛されているんだと思います」「とにかく優しく、ぼくにとっては神様のような人でした」——綴られた言葉を読むたびに、不思議な思いと主への感謝に満たされる。「当時は自分の無力さを思い知り、できることは『主に頼ること』以外

にないという思いでいました。そんな自分を見て後輩たちが称賛のメッセージを書いてくれたのであれば、ぼく自身ではなく、窮地に立ったぼくを支え導いてくださった主を感じ取ってくれたのだと思います。」

2022年6月、良匠兄弟はアメリカ・アリゾナ州ギルバート伝道部に専任宣教師として召された。主に仕える機会に心躍らせる良匠兄弟の胸の奥には、主と家族に支えられて試練を乗り越え、多くの友人に福音を伝えた日々が証となって輝いている。◆

今月のNews Headlines

● ニュースルームはこちら!

<https://news-jp.churchofjesuschrist.org>



- 東京神殿の再奉献に関する情報 6月29日リリース
- 日本東京神殿の歴史を深く考える末日聖徒ら 7月3日リリース
- 再奉献される東京神殿—数年の改築とパンデミックによる遅延のあと、神殿内での儀式が再開 7月3日リリース
- アイリング管長、アジアで最も長く稼働してきた教会の神殿、日本東京神殿を再奉献する 7月3日リリース
- 東京神殿の奉献の祈り—ヘンリー・B・アイリング管長は、2022年7月3日、東京神殿を再奉献した 7月6日リリース
- 神殿参入の予約方法—第3段階にある神殿への参入には予約が必要 7月11日リリース
- 福岡神殿の一時休館について—改修工事のため、2022年8月1日から一時休館 7月21日リリース
- 伝道活動と神殿礼拝のレガシーが日本の末日聖徒のキリストを中心とした未来を確かなものにする 7月22日リリース
- 清水順子(シミズ・ジュンコ) 姉妹の訃報 7月23日リリース

※上記リストは日本発信または日本に関連する記事のみです。海外発信記事(日本語)も数多く配信しています。

役員の変動

2022年6月22日から7月20日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動(敬称略)

- 神戸ステーキ西脇支部
会長: 宮脇 正行
- 神戸ステーキ北六甲ワード
ビショップ: 西 良介

専任宣教師

● 上から氏名、任地(伝道地)、出身ユニット、MTC入所日/着任日



ひょうどう
兵頭キアナ
スウェーデン・ストックホルム伝道部
松山地方部
宇和島支部
2022年1月8日
プロボ MTC 入所

*宣教師の方は着任の前後に写真と情報を所定のフォームからお送りください。

皆様の情報をお寄せください

会員の皆様の身近な話題をご紹介します
◎『リアホナ』日本語版編集室
〒106-0047 東京都港区南麻布5-8-8
TEL. 03-4545-3100(代)
電子メール:
JPNLiahona@churchofjesuschrist.org

◎国際機関誌『リアホナ』のお届け、その他商品に関するお問い合わせ——
教会配送センター
TEL. 03-5668-3391
FAX. 03-5668-3392